山多大石曰礜音學山多小石曰磔磩同土山戴石者曰岨祖同石戴土者曰崖嵬山有草木曰岠音記無草木曰岵音胡曰峘音該

〔東雅二地輿〕山ヤマ　義詳ならず、萬葉集抄に、昔は山をいひて子といひし也、ヤマといふは、ヤは高き義也、マは圓なるをいふなり、其形の高く圓なるをいふ也といへり、されど古語に八俣（ヤマタ）といひ、八田間（ヤタマ）などいひし例によらば、ヤマとは、唯その高く隔りぬるをいふに似たり、古語にヤと云ひしには、重り積れるをいひ、マと云ひしには、限り隔りぬるをいひしあり、凡そ物かさなり積りぬれば、其形自ら高し、限り隔りぬれば、その勢自ら間あり、されば後に漢字を傳へ得て、彌の字を讀てヤといひ、間の字讀てマといひ、ヤマなどいひける也、古に子といひしは、即嶺也、屋をヤといひしが如きは、圓かなるの義也、されど山の如きは、其形必圓なりとも、高き義なり、玉をタマといふべからず、古語にイヤといひしが如きは、イは發語の音なりとも、今も俗にいやが上に重れりといひ傳へたり、いやが如きは、古語の遺れるなり、彌の字を讀て、ヤともイヤともいふに至て、其字義によりて、此詞の增すなりしし程に、我國太古の時に、重り積れるをいひて、ヤといひし義には、隱れて見えずぬ、八の字讀て、ヤといふが如きは、此義ありとも見えけり、凡は古語の義を失ひし、是等の類多かるべし、先達の言に、あながちに漢字に執すまじき事なりといはれしは、是等の事のためにやあるべき、すべてかゝる事の如きは、よく我國の古書を讀む法知らん人は、其義自ら明か成べければ、多く言を費すにも及ぶべからず、

山の字讀て、ムレといひし如きは、百濟の方言也と見えたり、釋日本紀に峯嶺幷に讀てミ子といふ、上古には子とのみいひし也、万葉集抄に、昔は山を子といひしといふはこれ也、筑波根、富士根などいふ類也、

〔倭訓栞前編三十四〕やま　山をいふ、止の義、動かざるを稱すといへり、古今集にも、ひらの山をかくして、かくてのみ我おもひらのやまざればとよめり、一說に、彌間の義、彌高く間隔せるをいふなりともいへり、山陵をも山といへり、神祇式に到山作所といひ、三代實錄に山作司も見ゆ、神代紀にも、斬仆喪屋、此即落而爲山と見えたり、源氏にも陵墓をさして山といへり、塵積りて山となるといふ諺は、古今集の序に、高き山も麓のちりひぢよりなると見えたり、說苑、土積成山と見え